



クラウドファンディング  
被爆を生き抜いた  
「明子さんのピアノ」を  
次世代に響かせたい！  
活動報告書

## ピースボート

[pbglobal@peaceboat.gr.jp](mailto:pbglobal@peaceboat.gr.jp)

<https://peaceboat.org/>

Tel: 03-3363-7561

169-0075

東京都新宿区高田馬場

3-13-1-B1 ピースボート事務局

担当：松村真澄

**PEACE  
BOAT**

## 目次

「明子さんのピアノ」について	2
イベント報告	3
奏で継ぐヒロシマ～被爆を生き抜いた2つの楽器	3
被爆の記憶を伝える～音楽で、そして世界で	4
子どもも大人もよくわかる～核兵器禁止条約ってなんだろう？	4
感想文コンクール	
「奏で継ぐヒロシマ～被爆を生き抜いた2つの楽器」を視聴して	5
大賞作品「奇跡のピアノとバイオリン」 桂 菜奈さん	6
次点「被爆した楽器」ではない名前を持つ楽器たち」小手川 瑚春さん	7
まとめのごあいさつ	8

## 「明子さんのピアノ」について

米国ロサンゼルスで生まれた河本明子さんが愛用した「明子さんのピアノ」。明子さんは1933年に両親と広島に渡りますが、1945年8月6日に被爆し、ピアノは主を失ってしまいます。爆風によってガラスの破片で傷ついたピアノは、しばらくそのままにされていましたが、調律師の坂井原浩さんに修復され、ニロとみゑさんが代表を務める一般社団法人HOPEプロジェクトに維持されています。現在は、広島平和記念公園のレストハウスに所蔵され、訪れる人々にその歴史を伝えています。

私が所属するピースボートは、船旅を通じて、被爆者の声と核兵器廃絶のメッセージを世界に伝えてきました。2019年夏、HOPEプロジェクトの協力を得て、「平和と音楽の船旅～明子さんの被爆ピアノとともに」を行いました。広島から「明子さんのピアノ」、同じく広島で被爆し広島女学院の音楽教師、セルゲイ・パルチコフさんが愛用した「パルチコフさんのバイオリン」を船に乗せ、寄港地9回、洋上4回のコンサートを行い、2,000人以上の方にその音色を届けました。それ以来、「明子さんのピアノ」はこれからもっともっと奏で継がれ、そのために活用されていく必要があると考えています。

## イベント報告

### 「奏で継ぐヒロシマ～被爆を生き抜いた2つの楽器」

8月6日の夜、オンライン・イベント「奏で継ぐヒロシマ～被爆を生き抜いた2つの楽器～」を行いました。広島平和記念公園レストハウスから、被爆を生き抜いた「明子さんのピアノ」と「パルチコフさんのバイオリン」のお話と共演を配信。それぞれの楽器を、広島にゆかりのあるお二人の演奏家、三原有紀さん（ピアノ）と坂直さん（バイオリン）が演奏しました。広島市立牛田中学校 PC 放送部が製作した「ショパンを愛したピアノ」（2017年）と「パルチコフさんのバイオリン」（2021年）を放映し、番組製作に関わった2年生の中野愛実さん、HOPE プロジェクトのニロとみゑさん、廣谷明人さんのお話も伺い、多くの方に視聴いただきました。



## 「被爆の記憶を伝える～音楽で、そして世界で～」

今回のプロジェクト実施にあたり、クラウドファンディングを行いました。そのリターン賞品の中として、岩波ブックレット「明子のピアノ～被爆をこえて奏で継ぐ」を使わせていただきました。8月21日、その著者である中村真人さん（ドイツ在住フリーランスライター）を招いて、オンライン・イベント「被爆の記憶を伝える～音楽で、そして世界で～」を行いました。

音楽をテーマに「明子さんのピアノ」について、戦争の記憶継承をテーマにドイツの「つまずきの石」プロジェクトについてお話いただきました。この「つまずきの石」プロジェクトは、「世界最大の分散型記念碑」と呼ばれています。戦争被害の象徴的な場所に行かずとも、日常生活において、記憶を継承していくという試みです。被爆地でなくても、被爆を継承していく可能性について、大きなヒントを得ることができました。



## 「子どもも大人もよくわかる

## 核兵器禁止条約ってなんだろう？」

もう一つのリターン賞品『絵で見てわかる 核兵器禁止条約ってなんだろう？』（旬報社、2021年）を取り上げ、その監修を担ったピースボートの川崎哲とともに、オンライン・イベント「子どもも大人もよくわかる 核兵器禁止条約ってなんだろう？」を行いました。3組の親子、教育現場で平和学習を行っている現役教員お2人に出演いただき、質問をぶつけてもらい、この本を使って答え、核兵器の問題を、難しいことと遠のけてしまうのではなく、子どもとおとなが一緒に考えていく方法を探りました。東京都内の小学校で教える武藤先生は、「学校で被爆のことを話し、子どもたちがそれを家に持ち帰る。そのときのご家族の反応次第で、子どもの平和意識が全く変わってくる」と、家族でできる平和教育について語りました。

参加してくれた中学生から、「いま世界にこんなに核兵器があるけど、その責任は誰にあるの？（誰のせいで、こんなにたくさんになってしまったの？）」という質問がありました。そう問いたくなるのは当然です。だからこそ、核兵器をなくす責任は大人の私たちにある、と実感させられた鋭い発言でした。

## 感想文コンクール「奏で継ぐヒロシマ～被爆を生き抜いた2つの楽器」を視聴して

このオンライン・イベントを一過性のものに終わらせないために、視聴した子どもたちから感想文を募集し、コンクールを行いました。「この楽器は、平和の大切さを私たちに教えているのだと思います」

「核兵器のない世界を、これから私たちが作っていきます」  
応募作品には、このような強い思いが書かれていました。

選考は困難でしたが、大賞には兵庫県三宮市にお住まいの桂菜奈さん（応募時10歳）、次点には大阪の高校生、小手川瑚春さん（応募時17歳）が選ばれました。桂さんの作品「奇跡のピアノとバイオリン」には、被爆を「自分ごと」として捉え、2つの楽器が生き残ったこと、自分がいま生きているということは奇跡だと感謝し、平和の大切さを後世に伝えていこうという決意が記されていました。小手川瑚春さんの作品「『被爆した楽器』ではない名前を持つ楽器たち」は、このピアノとバイオリンが単に被爆した楽器ということではなく、明子さんとパルチコフさんの名前とともに親しまれていることに「胸が暖かくなる」気持ちになったといいます。大賞賞品として「広島への旅」が贈られました。コロナ感染状況を踏まえ、実施される予定です。



## 大賞受賞作品「奇跡のピアノとバイオリン」 桂菜奈

私はバイオリンを習っていて、クラシック音楽や作曲家に興味があります。そして、演奏することが大好きです。

母はピアノを弾くのが好きで、一緒に練習したり、一緒に発表会に出たりすることもあります。そこで、このピアノとバイオリンの音色を聴いてみることにしました。

まず、戦争で、たくさんの人の命がうばわれ、何もかもが失われた悲さんな状況の中でこの「明子さんのピアノ」と「パルチコフさんのバイオリン」が生き残ったことにとってもおどろき、生命力を感じました。また、二つの楽器の音色は、私たちに大切な事を語りかけてくれているようなやさしい音で、まるで生きているかのように思いました。

わたしも、毎日バイオリンをひいているとまるで、楽器が生きているように感じるがあります。また、やさしい気持ちで弾くとやさしい音を出してくれます。

だから、パルチコフさんや明子さんも、きっと、楽器に色々な思いをこめて、大切に演奏されていたのだと思います。そして、この楽器たちは、私たちに、戦争のおそろしさを伝えるために、二人のかわりに生きているんじゃないかなと思いました。

この二つの楽器が私たちに教えてくれたこと。それは

「二度と戦争なんてしてはいけない。」

ということです。一発のばくだんで。一しゅんの出来事で。たくさんの人の命がうばわれ、幸せも、思い出も、希望も、何もかもが失われました。

人は争うために生きているわけではありません。幸せを分かち合うために生きているのです。戦争なんて、何の意味もありません。わたしたちは、この二つの楽器から学んだことをいつも心にとめ、そして、後世につたえていくことが大切です。

わたしは毎日、当たり前のことのように、勉強したり、テレビを見たりしていますが、これらのことは奇跡なのです。生きているだけで、奇跡なのです。

だから今、生きていることに感しゃして一日一日を大切に生きていこうと誓いました。そして、明子さんのピアノと、パルチコフさんのバイオリンの優しくて美しい音色から学んだことを心にとめて、戦争でたくさんの人の命がうばわれたこと、生きているだけで奇跡なんだということを、次の世代に伝えていきたいと思います。明子さんのピアノとパルチコフさんのバイオリンへ。二人の代わりに必死で生きのびてくれて、本当にありがとう。

## 次点「『被爆した楽器』ではない名前を持つ楽器たち」 小手川 瑚春

私がこのオンラインコンサートに参加し、広島市牛田中学校さんが作成された二つのビデオを視聴してまず思ったことは、その中で出てきた二つの楽器がそれぞれ被爆ピアノ、被爆バイオリンではなく、「あきこさんのピアノ」「バルチコフさんのバイオリン」と今の人たちにそう呼ばれ、親しまれていることに対しての「良かった」という気持ちです。この気持ちはどうにも言葉にすることが難しく、あいまいな表現になってしまうのですが、例えばこの二つの楽器が もしも「被爆したのに現代にまで形を残している楽器」と取り上げられていたとしたら、それはすごいことだとは思いますがどこか無機質的な感動になる気がして、ですが実際のように「この楽器を愛し演奏する人がいて、その思いを現代に残していること」に価値を得て、それを大切に思う人たちがいる、と思うと胸が暖くなるような気がするのです。それは、そのものだけではなくその楽器を愛し、音楽を愛した人がいて、またその残された思いを汲んでいる人たちがいて、私たちにも伝えてくれて、それを知ることができたからこそだと思います。

お話を聞く中で、「音楽を愛せるのは平和なこと」という言葉を聞いて、確かにその通りだと思いました。現代の私たちはこのようにコンサートに参加して音楽を聞くことも、もっと気軽に手元のスマートフォンで簡単に音楽を聞くことができ、とても近い距離で音楽に親しんでいます。でも、それを当たり前のこととして続けていくためには、私たち一人一人が平和に対する意識を持たねばならないのだと気付かされました。平和であることは当たり前ではない、と言うのはいささか言葉として強いかもしれませんが、平和に対して無頓着になるのと自覚するのとでは随分と変わると思います。それが大勢であれば、あるほどに。

私はまだ学生で、この平和を続けていくためにできることを今すぐ思いつくことはできないし、仮に思いついたとしても実行することはおそらく困難だけれど、自覚してその意識を持ち続けることならできると思いました。今は平和であるということに、気付き、実感し、自覚する。それだけでも、世界を変えることは出来なくても、自分を変えることは出来ます。

コンサートではエルガーの愛の挨拶、クライスラーの愛の悲しみなど、愛にまつわる曲が多く、これは私たちへのメッセージなのかなと思いました。二つのビデオの中ででてきた、「ショパンを愛したピアノ」「音楽を愛せることは平和なこと」と、愛に関することを思い起こさせたからです。

今回のコンサートのように、原爆のことについて知れること自体が現代の平和だと思っています。過去について知り、過ぎ去ったものだからと無視せずに私たちにも伝えてくれる人がいる。だからこそ、私応募時たちは実感して自覚することが何よりも重要だと思いました。

## クラウドファンディング

### 「被爆を生き抜いた『明子さんのピアノ』を次世代に響かせたい」

オンライン・イベントと感想文コンクールの実施、また、「明子さんのピアノ」の維持費を集めるため、7月末からの1か月間、クラウドファンディング「被爆を生き抜いた『明子さんのピアノ』を次世代に響かせたい」を行いました。80名のご参加で目標の60万円を達成し、643,835円のご支援をいただきました。約1か月の取り組みの間、多くのメッセージもいただきました。心より感謝いたします。いつか、クラウドファンディングで「明子さんのピアノ」を知った方々も、広島で実際に音色を聞ける機会を持てるといいな、と思っています。



広島市平和記念公園レストハウス ピアノカフェ  
奥に「明子さんのピアノ」



## 2021年夏を振り返って

76年経っても、将来たとえ核兵器が廃絶されても、広島・長崎を伝えていくのがなぜ大事なのか。それは人間の根幹なのである「尊厳」という価値観を守っていくためだと思います。残忍な形で多くの命を奪った原爆、重なる死を「何も感じなくなった自分」が怖かったと語る被爆者の方もいます。人間性を失ってはいけない、「明子さんのピアノ」は、そう教えてくれます。

子どもたちは素直な感性で受け止めてくれます。そして、その保護者や指導者の方々もその感性を羽ばたかせたいと思っています。この夏、それが本当によく理解できました。あとは、中央型（広島・長崎で直接学ぶ）でも、分散型（被爆地以外で取り上げる）でも、世界中の子どもたちがその歴史に触れる機会を多種多様に作っていく活動が、私たちのこれからの挑戦なのだ、と改めて思っています。